

5月宿題回答の手引き

物事の調べ方ー先行研究、参考文献はどう探せばよいかー

はじめに

1. 文献調査の深まりとテーマ探索は関連する

- (1) インターネットの検索機能を使い、テーマとその周辺を概括的に調べる
- (2) 日経テレコンでテーマとその周辺を概括的に調べる
- (3) 入門書にあたる
- (4) 大学レベルの教科書でテーマに関連する基本知識を得る
- (5) テーマに関連する専門書を読み、テーマの理解と把握を深める
- (6) 大学図書館でテーマに関連する書籍を探す
- (7) 一般図書館でテーマに関連する内容の書籍を探す
- (8) 大型書店でテーマに関連する書籍を探し、チェックする
- (9) 古書店でテーマに関連する書籍がないか探す
- (10) 専門図書館で参考資料や報告書、統計書等にあたる
- (11) 文献調べや資料集めは、論文の構成との関連を意識して行う
- (12) 調べた素材や材料はその時点毎に整理する

2. 論文資料を探す

- (1) 国会図書館等の検索データベースで関連する論文を探す
- (2) ドメインによる検索方式で、テーマに関係する論文や報告書等を入手する
- (3) 検索エンジンにより、テーマに関連する資料や論文等の所在を検索する
- (4) 自分のテーマに関わる情報源になるところを探し、そこから情報をたぐる
- (5) 政府審議会等の報告書や民間シンクタンク等の各種刊行物をチェックする
- (6) 学術誌のバックナンバーにより、自分のテーマに関連する論文がないか探る
- (7) 収集した論文等に関する参考情報はレジメのかたちにとまとめておく

3. 資料へのアクセス方法や整理の仕方を工夫する

- (1) 自分のテーマに関連する専門家、有識者を特定し、彼らの著作を集める
- (2) テーマに関連した専門家や著書は、新聞記事からも拾うことができる
- (3) テーマを支える基本概念や基本構成要素から参考文献・資料を探す
- (4) 同様な参考文献の収集作業は、テーマのサブ概念についても行ってみる
- (5) コア文献には、自分の論文のどこでどう使えそうか簡単な書き込みを入れる
- (6) 参考文献や先行研究も、コア文献とそれ以外に大まかな区分をする

おわりに

5 月宿題回答の手引き

物事の調べ方ー先行研究、参考文献はどう探せばよいかー

はじめに

研究を進め、論文を書くためには、先行研究を調べるのが大切だとはよくいわれる。しかし、そもそも何のために先行研究を調べ、参考文献や各種資料にあたるのだろうか。こう問うと、その根拠は意外にはっきりしていない。「論文を書くときはそのようになっていく」。あるいは、「そのように教えられた」くらいの答えしか返ってこない。ところが、この程度の答えのままでは、先行研究を調べることも自体もなかなか面倒であるので、十分な先行研究調査や文献調査は行われがたい。通り一遍の先行研究調査や文献調査にとどまりがちである。こうして、論文を書く上で役立つ先行研究調査や文献調査は、何も行われないという状態になる。

そこで、なぜ先行研究や文献を調べる必要があるのか、あらためて振り返ってみよう。そうすると、これは論文を書くためである。もっといえば、論文を書く上で入口のこととはいえ大事なテーマの探索や、テーマ設定の可否の判断、あるいは問題設定の適否の判断に役立てるためである。よりわかりやすくいうなら、自分のテーマに関連して何がわかっていて、何がわかっていないか、明確な仕分けをするためのものといってよい。なお、論文づくりのプロセスにおいて先行研究調査や文献調査がとくにどの部分で重要になるかといえば、こうしたことからしてもやはり初期段階である。

1. 文献調査の深まりとテーマ探索は関連する

先行研究調査や文献調査が論文づくりの初期段階で意味が大きくなるのは、そうした調べることでテーマを明確化し、問題設定に至るプロセスは強く関係しているからである。先行研究調査や文献調査が進むと、テーマは明確化され、何をどう論じればいいのか、その概要がみえてくる。これでやっと論文づくりの入口に立てる。また、この点に関連していつておかねばならないことは、論文を書くことに慣れていない者が、いきなり十分な先行研究調査や文献調査を行おうとしても過大な仕事になりかねない。そこで、まずはおぼろげながら自分のテーマのイメージをつかむことを目標にするのがよい。つまり、初学者の段階では、それにふさわしいかたちの先行研究の探索作業があるということだ。

初期段階で物事を調べ、文献を集める場合は、資料の読み方にもそれなりの工夫を要する。なぜなら、初歩的な段階とはいえ、先行研究調査や文献調査を多少なりと正しい方法で行えば、読むべき文献資料はたちどころに相当量で押し寄せてくるからである。これらをどう処理すればよいであろうか。まず情報化・インターネット時代における情報の受けとめ方、読みとり方の基本としては、「大量な情報を、時間をかけずに、正確に読みとる」ことである。これには少しばかりの工夫がいる。すなわち、文献資料を読むとき、常に基本的ないくつかの問いかけを用意して読むことである。たとえば、その問題はどのような基本構成要素からなるのか。その概念の構成要素は何か。その問題構造はどのようなものか。そのことの本質は何か。他の問題とどう関連するか。全体状況の中で、どう位置づけ

られるのか。何にどう応用できそうかなどである。

次に、以後の論文づくりにおいて必要な作業を考えれば、ここでの1や2の準備的作業段階では、その場毎でメモをつくるのが大事になる。文献探索した結果により、テーマはどのようにとらえられるか。資料はどう位置づけて、どう整理するか。これらをメモする。こうした作業を行わないと、せっかく先行研究や文献調査を熱心に行っても論文づくりの実際において生かされることは少ない。また、テーマに関する見通し用のメモや、整理メモをつくろうとすると、小倉ゼミで行っている毎回のゼミ後における「ゼミ報告」づくりの経験が非常に役立つことに気づく。「ゼミ報告」には、このような意味があることを銘記してほしい。

(1) インターネットの検索機能を使い、テーマとその周辺を概括的に調べる

近年では、物事を調べる場合、まずインターネットを使って概括的な情報を得るのが一般的になっている。また、時間がない社会人の場合、問題に関する大まかなイメージを早めに得ることは大切である。つまり、ここでいうインターネットの検索機能を使い、テーマとその周辺を概括的に調べるとは、こうした意味合いからのことである。それゆえ、この項目が冒頭にあるのは、もっぱら手っとり早く問題をつかむための便法と心得ておいた方がよい。

(2) 日経テレコンでテーマとその周辺を概括的に調べる

テーマとその周辺に関する概括的な情報を得るには、日経テレコンのようなデータベースを使うことも便宜である。日経テレコンを使った新聞記事や雑誌記事の検索により、テーマとその周辺に関する主要な情報を集める。これにより、テーマとその周辺に関し、問題全体の中で位置づけることが比較的時間をかけずにできるようになる。

ただし、これも(1)と同様にあくまで問題把握のための一次的な情報である。したがって、こうした情報を論文づくりにそのまま使うことは多くない。

(3) 入門書にあたる

自分のテーマについて深く知り、問題を固めていく段階の文献探索は、インターネットやデータベースを介した作業だけに頼らず、直接文献に接する探索作業が無視できない。議論を組み立てるには、こうした文献探索の経験は不可欠である。

ここでは、目的に沿う文献にあたるのがよい。目的に沿う文献とは、自分のテーマについて深く知り、問題を固めるためのものである。具体的には、テーマに関係する入門書的な書籍である。この典型は新書などであるが、各種入門書により、テーマに関係する概括的知識や背景的知識を得る。これにより、自分のテーマとしたい領域がどのようなものかおぼろげながら知って概要をつかむことができる。つまり、これはテーマに関する土地勘を養う作業といえる。

ここで注意すべきは、入門書も手当たり次第に選ばばよいわけでないことである。論文づくりに役立つものを選ぶには、それなりの基準が必要になる。つまり、入門書や大学課程の標準的教科書を選ぶにしても、自分なりに納得いく基準を立てなくてはならない。これは外形的な基準でいえば、たとえば、増刷を何回か重ねたり、刷り数が多いといったこ

とである。こうした本は、定番的なテキストの要素を持つと判断できるからである。

(4) 大学レベルの教科書でテーマに関連する基本知識を得る

これも(3)に近いが、調べる作業のレベルは上がり、中級の状態になる。ここではテキストであげられている自分のテーマに関連する内容の注や参考文献にあたる。また、テーマに関連するキーワードは、索引や辞書も活用してよく調べておく。これがテーマに関連した基本用語や基礎概念を自分のものにする上で役立つ。次の(5)や(6)の作業と組み合わせて行うなら、より効果的になる。

(5) テーマに関連する専門書を読み、テーマの理解と把握を深める

(3)や(4)の作業を進めると、テーマに関連する専門書とはどのようなものか、ある程度見当がつくようになる。その上で、これら専門書のさらにテーマ該当部分に絞って読み、(4)で述べた基礎的整理作業を繰り返す。そうすれば、テーマの理解と把握が進む。

(6) 大学図書館でテーマに関連する書籍を探す

大学図書館の開架書庫および閉架書庫でテーマに関連すると思われる書籍を探す。そこで、目あての書籍があるかないかはさしあたり別にして、関連書籍を手に取り、見るという行動体験を繰り返して調べる。知的なことを学ぶ上でも、こうした体にしみ込ませる経験が大切になる。なお、上の(3)から(10)の作業は、いずれもテーマに関し、自分なりの文献リストをつくるための前段的作業である。

(7) 一般図書館でテーマに関連する内容の書籍を探す

論文を書くことは、専門領域に関する仕事である。図書館でいえば、大学図書館の領域である。とはいえ、テーマについて深めることが、すべて大学図書館どまりとなるわけでもない。

放送大学大学院は、一般市民を対象にした大学院である。このことが持つ意味合いを考えると、物事の調べ方も生活の日常に即したレベルからの積み上げやチェックが大事になる。そこで、文献を調べる対象としての図書館も、大学図書館だけでなく、地域の公共図書館を意識的に視野に入れておく。ここに自分のテーマに直接関連する図書がどれだけあるかどうかは別問題である。それより、一般市民レベルからみて、テーマの周辺や背景領域に関しどのような図書があるか見当をつけられるようになることの意味が大きい。つまり、こうしたところでの書籍チェックは、全体状況の中でのテーマの位置づけや、テーマの広がり具合を知るために役立つ。

(8) 大型書店でテーマに関連する書籍を探し、チェックする

テーマに関し、時代や社会の中でそれがどのように位置づけられるか、自分なりに把握できなくてはならない。このため、役立つのが大型書店でテーマに関連する書籍を探し、チェックすることである。これにより、時代や社会がどのように動いているか、書籍をとおして把握できる。これは、自分のテーマが時事的なもの、あるいは現実問題にかかわるものであればあるほど大事になる。

(9) 古書店でテーマに関連する書籍がないか探す

テーマが幾分かでも歴史的なものに関係するなら、古書店でテーマに関連する書籍がないか探してみる必要がある。少なくとも東京都内の古書店を訪問し、探索してみる価値は、十分にある。

(10) 専門図書館で参考資料や報告書、統計書等にあたる

テーマを限定し、専門化が進めば進むほど、その分野における専門的情報収集機関の存在意義に気づく。こうしたものの筆頭が、専門図書館といわれる存在である。東京都内には、各業界団体に関係するものを中心にして多くの専門図書館がある。たとえば、金融分野でいうなら、全国銀行協会の図書館などである。

(11) 文献調べや資料集めは、論文の構成との関連を意識して行う

問題とテーマをつかむための文献調べや資料集めでは、論文の構成との関連も意識する。これにより、今行っている文献調べや資料集めが、論文づくりの中でどのようなステップに位置するか、明確になる。また、調べたことや集めた素材や材料は、論文の中のどの部分でどう使うか、それとも差しあたっては使えないかの判断をしておく。これをしておかないと、いくら文献や資料を調べたり集めても、宝の持ち腐れとなり、有効に使えない。また、文献や資料を多く集めることのみ意識すると、それをどう使うかということが念頭から逸れてしまう。これも注意しなければならない。

(12) 調べた素材や材料はその時点毎に整理する

1で調べた素材や材料は、その時点毎で整理しておく必要性が大きい。これをやっておかないと、せっかくいろいろ調べても後で活用する度合いは大きく減じることになる。

2. 論文資料を探す

資料探索の第2段階は、論文等のかたちになった資料を中心にして探す段階である。これは、先行研究に関する探索と下調べ作業に関する既存イメージに合致するものとなる。

(1) 国会図書館等の検索データベースで関連する論文を探す

インターネットが普及した近年では、インターネットを経由したデータベースで論文の所在に目途をつけるのが有力な方法となりつつある。このうちもっとも手っとり早いのは、基幹的な情報収集機関のデータベースを使うことである。たとえば、国会図書館や国立情報学研究所のデータベースを使えば、テーマに関連したキーワードを打ち込むだけでそれに該当する論文リストが得られる。このリストを基にして、所属する大学図書館等を通じて文献複写の依頼をする。そうすると、論文コピーが届くまで若干の時間はかかるが、さほどの労力は使わずにもとめる論文の全文コピーを入手できる。

なお、英文の検索データベースには、EBSCO(有料)がある。ただし、これは高額であることと大学でもデータベースを保有するところは限られる。したがって、一般社会人の場合であると、利用のアクセスからして制約される。また、論文づくりのデータベースとし

て必ずしも十分なものともいえない。実際、資料探索用の英文データベースでは、医療関係データベースの PubMed など専門データベースの方がより効果的な現状にある。

(2) ドメインによる検索方式で、テーマに関係する論文や報告書等を入手する

ここでのドメインによる検索とは、次のようなことである。すなわち、大学関連のアドレスコードは「ac.jp」である。また、インターネットにより、論文等を検索し、読み込み可能にするソフトが「adobe」である。したがって、「adobe.ac.jp」と入力すれば、大学関係における論文等でインターネット上に流通しているものが特定できる。これに自分のテーマを付加して入力するなら、インターネット経由でテーマに関連する論文や報告書等が入手できる。

(3) 検索エンジンにより、テーマに関連する資料や論文等の所在を検索する

インターネットの検索エンジンを使えば、テーマに関連する資料や論文等の所在が容易に検索できる。具体的には、インターネットの検索エンジンに自分のテーマやそれに関するキーワードを打ち込む。これは参考文献や論文調べのメインにするなら、問題が出てくる。しかし、補助的に使えば有効な方法といえる。

(4) 自分のテーマに関わる情報源になるところを探し、そこから情報をたぐる

自分のテーマに関わって情報源になるところを特定できれば、情報収集のスピードや効率は飛躍的に向上する。

たとえば、在中国日系企業の人材マネジメントを例にとると、以下のようなものが情報源としてあげられる。東洋経済新報社『海外進出企業総覧』、国際協力銀行（J B I C）開発金融研究所、日本貿易振興機構（J E T R O）、日中投資促進機構、日中経済協会、日本在外企業協会、野村総合研究所、富士通総研、日経リサーチ、企業研究会、リクルートワークス研究所、中小企業基盤整備機構、中小企業総合研究機構、労働政策研究・研修機構などである。

あるいは、ビジネス関連で各企業の財務情報を得る場合でいえば、各社 IR サイトから得られる有価証券報告書の年次情報がある。有価証券報告書の年次情報では、EDINET が公式情報であり、より網羅的なサイトである。

なお、こうした情報源となるところは、それぞれのテーマに応じて異なる。そこで、資料を調べる学生は、自分のテーマに応じた情報源となる機関はどこか、早く特定する必要がある。逆にいえば、こうした情報源が特定できないようなテーマは、早めに変えるか、見切りをつけた方がいいともいえる。論文は、豊富な素材がないと書けない。資料調べにおいては、このことを銘記することが非常に大事である。

(5) 政府審議会等の報告書や民間シンクタンク等の各種刊行物をチェックする

日本の政府機構は、膨大な情報を集め、それを整理分析するシンクタンクの側面を持つ。したがって、政府機構や民間シンクタンクを含めた刊行物には、社会の問題を扱う場合に典型的だが、参考となる有益な情報が含まれていることが多い。そこで、各省庁で設けている審議会や委員会、研究会とそこでの報告書等、あるいは各種白書や調査報告書や、民

間シンクタンク等の各種刊行物についてチェックする必要がある。

なお、ここでの資料は、各機関における紀要論文、報告書や、その他のデータの情報が中心となる。これらは学術的な意味でいう先行研究や参考文献というより、どちらかといえば、問題やテーマに関する素材データの内容的な情報コンテンツといった性格が強いものである。

(6) 学術誌のバックナンバーにより、自分のテーマに関連する論文がないか探る

各学会では、毎年の大会の成果は学会報告集のかたちでまとめられる。また、学会の紀要を擁しているところでは、毎号レフリー付きの論文が載る。これらは基本的に継続して発刊されているので、バックナンバーでの閲覧が可能となる。また、各大学で発行する研究紀要や専門的学術誌の場合も、同様である。そこで、これら学会誌、大学の紀要、各種専門的学術誌のバックナンバーが閲覧できる場を探し、自分のテーマに関連しそうな論文はないかチェックする。これも基本的な資料調べにおいて欠かせない作業になる。

(7) 収集した論文等に関する参考情報はレジメのかたちにまとめておく

2で調べた素材や材料も、その時点毎に整理する必要性が大きい。これはA4版サイズ用紙2、3枚に内容をまとめておく。これをしておかないと、せっかくいろいろ調べても後で活用する度合いは大きく落ちてしまう。

3. 資料へのアクセス方法や整理の仕方を工夫する

文献調べでは、どのように資料にアクセスするかについての工夫や注意も大事である。これにより、上のような標準的資料調べでは得られなかった資料に到達できる可能性があるからだ。さらに、資料を得たあとどう論文づくりに活用するか観点でいえば、資料整理に関し、何らかの工夫をすることが欠かせない。

(1) 自分のテーマに関連する専門家、有識者を特定し、彼らの著作を集める

先行研究調べといっても、論文そのものに注目するより、論文を書く書き手の方に注目し、そこから目当ての論文や文献を探ろうとする行き方がある。これは、自分のテーマに関連して評価できる業績をあげている専門家、有識者を特定する。そして、彼らの著作を網羅的に集めることにより、自分のテーマに関連する文献の渉猟の範囲を広げていく。こうしたやり方である。

(2) テーマに関連した専門家や著書は、新聞記事からも拾うことができる

時事的なテーマや現実の政策問題を新聞で継続的に追っていると、自分が追求するテーマに関連することを研究している専門家や有識者がコメントその他のかたちで登場することがある。ときには、その著作等が紹介されることもある。これらの場合は、直ちにそうした専門家や著作その他周辺の関連事項についてあたる必要がある。

(3) テーマを支える基本概念や基本構成要素から参考文献・資料を探す

テーマを支える基本概念や基本構成要素にも、それをより明確に把握するための参考文献・資料となるものがありうる。そこで、テーマを支える基本概念や基本構成要素から参考文献・資料を探すこともときに必要になる。テーマに関する基本概念や基本構成要素を把握する上で参考となる文献は、論文の議論を組み立てる上で、中核的な役割を果たす。この意味で、これらをコア文献と呼ぶことができる。

(4) 同様な参考文献の収集作業は、テーマのサブ概念についても行ってみる

テーマを支える基本概念や基本構成要素だけでなく、サブ概念についても、同様な参考文献の収集作業を行ってみる必要がある。これにより、論理の次元を深められるので、調べることに深みが出てくる。

(5) コア文献には、自分の論文のどこでどう使えそうか簡単な書き込みを入れる

コア文献は、論文の議論を進める上で中核となるものである。それだけに、それを入手して一通り読むだけでは終わりにならない。その読み方が大事である。したがって、一通り読み終わったとき、基本概念や基本構成要素の把握に関してメモをしておくことが肝要である。それは、どこが参考になるか、あるいはどのような点に触発されるかといった内容である。

(6) 参考文献や先行研究も、コア文献とそれ以外に大まかな区分をする

論文の基本概念や基本構成要素を明確にするという点では、参考文献や先行研究についてもコア文献とそれ以外のもので大まかに区分しておくのがよい。論文の議論を的確に進めるには、そのように整理した文献リストづくりが役立つ。

おわりに

先行研究調査や文献調査は大事であるが、すべては論文を書くため、論を立てて論じるためである。それ自体が独立して意味があるわけではない。ここからは、先行研究調査や文献調査の意義と役割があらためて明確になってくる。それは次のようなことである。

すなわち、論文づくりにおいては、下調べの段階で多くの先行研究や文献調査を行う。ところが、それを論文の中でどれだけ使うかという点、それはごく少ない。多くの場合は、集めた資料を論文の中で直接的には使わない。この意味では、「資料を捨てる」ことになる。逆にいうと、論文の成否は、どれだけ資料を捨てることのできるかで決まってくるといってもいい。では、論文の中でほとんど使わないにもかかわらず、なぜ先行研究調査や文献調査を行わねばならないのか。それは、先行研究調査や文献調査が論じることの基礎づくり作業になるからだ。こうした基礎づくり作業を欠いて、的確に論じることはできない。したがって、多少でもまともな論文を書こうとすれば、やはり先行研究調査や文献調査をしっかりと行うしかない。こうしてみると、先行研究調査や文献調査の役割は、論文づくりにおける縁の下の力持ち的などころにあるということになる。